



(徳島)

徳島・南前川町一丁目遺跡 みなみまえがわちよう

- 1 所在地 徳島市南前川町一丁目
- 2 調査期間 二〇〇〇年(平12)四月～八月
- 3 発掘機関 (財)徳島県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 谷 恒二・前川直江
- 5 遺跡の種類 城下町
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は新町川・助任川などの網目状に流れる河川によって分けられる徳島城下町各地区「島」のうちのひとつ、助任・前川地区に位置する。

同地区は徳島城の北側にあたり、主として中・下級武士の居宅として積極的な開発対象となっていたことが知られている。近接地の遺跡として、同地区内の中前川町二丁目遺跡が一九九九年度に調査され、武家屋敷地の一角のゴミ捨て場

である池状遺構から二〇点以上の墨書木製品が出土した(本誌第二三号)。

南前川町二丁目遺跡は、絵図との対照から、宅地化の年代や屋敷の家主の変遷の状況が判明している。一六五〇年以前のいくつかの絵図では、助任川の流路内に相当し、この段階での宅地化は行なわれていない。寛文六年(一六六五)の絵図では、川岸部分の開発を経て「侍屋敷」と表記されている。元禄四年(一六九二)の絵図に初めて境界の表現と拝領者の名が記され、以降は東西の二区画が二武家の宅地であったことが判明している。元禄四年から享保年間(一七一六～一七三六)では速水家(西)と山崎家(東)の二家、天明年間(一七七二～一七八九)から安政年間(一八五四～一八六〇)では速水家(西)と佐山家(東)の二家、明治二年・三年では速水家(西)と村田家(東)の二家の所在が確認される。山崎家は断絶した可能性がある。

遺構面は三面が検出され、最も下層の第三遺構面は一七世紀中葉から一九世紀中葉まで、第二遺構面が一九世紀から江戸時代末期、第一遺構面が明治初頭と考えられる。各遺構面で屋敷境界となる溝が検出されている(第三遺構面SD三〇〇一、第二遺構面SD二〇〇一、第一遺構面SD一〇〇一・SD一〇〇二)。いずれも、石組みなどを伴わない素掘りの構造で、年代が下るにつれて幅が狭まる。

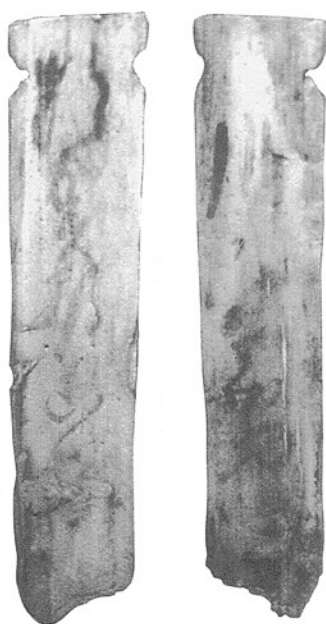
木簡が一二点、第三遺構面の池状遺構(SL三〇〇二)から出土

した。SL三〇〇一は長大な隅丸長方形で長軸一七・七m短軸七・〇m、最大の深さは〇・六mを測る。埋土は大別して最下層・下層・中層・上層の四つに分けられるが、異なる層位から出土した遺物に接合関係があり、層序が明確な時期差を反映していない。木簡(1)~(8)は下層に、(9)~(12)は中層に伴うものである。出土遺物からみた池の年代は一八三〇~一八六〇年が中心で、明治初年には埋められていたと考えられる。

8 木簡の内容・釈文

- (1) ・「 \angle 舩 \blacksquare \square 中」^{〔所我カ〕}
 ・「 \angle \square 原ノ元太」
 135×30×5 033
- (2) ・「 \angle 川口罷出者 \square 」
 ・「 \angle 那賀郡山口村 \square 」
 (125)×27×4 039
 (131)×28×3 081
- (3) \square
 (139)×(38)×4 081
- (4) \square
 139×(38)×4 081
- (5) ・「 \square 欠カ」
 ・「 \square 聖」
 (110)×(21)×7 081
- (6) \square
 (81)×(57)×7 081

- (7) ・「 \square 野カ」
 ・「 \square 山」
 38×26×17 061
- (8) ・「 \square 」
 ・「 \square 」
 50×27×17 061
- (9) ・「 \angle 内田 \square 中」^{〔縁カ〕}
 ・「 \angle \square \square 」
 (134)×30×3 033
- (10) \square
 150×(27)×6 081
- (11) ・「 \square 」
 ・「 \square 」
 222×38×6 011
- (12) ・「 \square 」
 ・「 \square 」
 97×62×11 061
- (1) (2) (9)は荷札木簡、(7) (8)は絵合わせとみられる遊戲具、(12)は平面形雲形を呈する裝飾材である。文字はその側面にある。
- (1)の「ノ元」は「メ吉」の可能性もある。
- (2)の木簡にみえる那賀郡山口村は現在の阿南市山口町にあたる。
- 山口村の天保五年（一八三四）段階の村高九二・二石余には、藩士の知行地と徳島藩領が混在しており、七人の知行地の中には絵図にも



(2)

確認される佐山家の名がある。山口村は那賀郡・阿南市などを流れる桑野川に隣接しており、この木簡は河川に設けられた番所を通過する際の許可証である。河川を経路とした物資の運搬状況を示すものと推定される。

徳島藩の在地支配制度として、藩士とその領地との直接的な関係を示す地方知行制がある。文献からの検討も行なわれているが、出土木簡にもその状況を示す事例が増加している。中徳島町二丁目遺跡（本誌第二二号の徳島城下町跡）、中前川町二丁目遺跡（本誌第二三二号）がそれに相当する。所属年代や藩士の石高、所領地の分布などの情報が蓄積されつつある。それに伴い、物資の流通状況もより具体的に becoming している。

執筆にあたって、報告書作成時の木簡釈読者である根津寿夫氏（徳島市立徳島城博物館）のご教示を得た。

9 関係文献

徳島県教育委員会・（財）徳島埋蔵文化財センター『南前川町二丁目遺跡——鳴門教育大学（附小）校舎新営埋蔵文化財発掘調査報告書——』（徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第三六集）（二〇〇二年）

（藤川智之）

木簡学会役員（二〇〇一・〇二年度）

会長 佐藤 宗諄		副会長 鎌田 元一		委員 今泉 隆雄		清水 みき		土橋 誠		本郷 真紹		山中 敏史		渡辺 晃宏		石上 英一		幹事 市 大樹		鈴木 景二		西村さとみ		増渕 徹		吉江 崇	
田辺 征夫		岩本 正二		舘野 和己		西山 良平		榎山 明		吉川 真司		東野 治之		岩宮 隆司		竹内 亮		馬場 基		山本 崇		吉川 聡					
佐藤 信		寺崎 保広		平川 南		山下信一郎		和田 萃				鷺森 浩幸		鶴見 泰寿		古尾谷知浩		横内 裕人									